

地震で傷ついた蔵づくりの ブティックを再建

ブティックまると（福島県伊達郡国見町）



東日本大震災で蔵づくりのブティックを失った東海林美智子さんに、笑顔が戻ったのは震災から1年4カ月が経

過した昨年7月6日だった。新たな店舗をオープン、店内は「懐かしい顔や新しい顔」で久し振りににぎわった。「地域の人が集まる憩いの場所にした」との思いで再建した店舗に、地域の人たちが集い、笑い、交流する姿を目の当たりにして、東海林さんは安どの表情を見せた。

大震災の時、東海林さんは台所に立っていた。これまでに聞いたことのない携帯電話の地震警報で、店舗の敷地内にある母屋の裏庭に飛び出し、大きな木にしがみついた。地震が弱まるのを待って、店舗を見に行くと、蔵づくりの屋根から瓦は落ち、壁が剥がれ、ウィンドウのガラスは辺り一面飛び散っていた。歪んだドアをこじ開け、中に入ると壁から飾ってあった商品は散乱し、土壁から落ちた砂で商品は埃ま

みれになっていた。

停電でテレビを見ることができず、被災状況がまったく入らない。3日目に通電、初めて被災地の様子をテレビで知ることができた。津波で流され、何もなくなった町の風景が画面に映し出されるのを見て、東海林さんは「私たちは住むところがある。少しぐらいの不自由は我慢しないといけない」と、自分に言い聞かせた。

蔵づくりの店舗は、 地元住民の憩いの場でもあった

ブティックまるとは、東海林さんが大正時代に建てられた蔵を改装して始めたものだ。米穀店を営んでいた創業者は、蔵を米や肥料の店舗とし活用していた。その後、メリヤス工場を始めた義父母がセーターなどを販売するための店舗にしていた。30数年前、洋裁が得意だった東海林さんが蔵を改装してブティックとして使っていた。店舗の片隅には、「お茶飲みコーナー」を設け、地元の人たちの憩いの場ともなっていた。

開業から30周年を迎え、「まちの洋服屋さんとして、地元の人たちが集まれる憩いの場所として、さらに地域に

貢献したいと考えていた」矢先に大きな地震が蔵づくりのブティックを襲った。

商品が散乱し、埃で埋まった店舗内を見た瞬間、東海林さんは、「もうだめだ」と思った。国見町商工会の女性部長を務めていたこともある東海林さんを励まし、激励してくれたのは、女性部の仲間たちだった。「県内でガソリンスタンドを営む元女性部長が1時間以上かけて、米とガソリンをタンクに詰めてわざわざ届けてくれました。橋や道路が寸断され、『どうやって来たか分からない』と言うんです。その姿を見たあなた、涙が止まりませんでした」。東海林さんは、震災当時を振り返り声を詰まらせた。

お客さん、義母の後押しで、 仮設店舗のオープンを決意

近所の友人たちも「とにかく商品だけでも片付けたら」と、東海林さんを励ましてくれた。友人や親族などの助けで、真向かいの空き店舗を借りて、商品を運び込んだ。商品の片付けに追われる中、東海林さんは精肉店に揚げものをつくってもらい、避難所に差し入れをした。



蔵づくりの店舗跡地に新たにオープンしたブティック

「片付けるのに追われ、これからのことを考える余裕がありませんでした」。そんな中で、なじみのお客さんから「いつ店を開くの」と声をかけられた。

「店の再開を待っているお客さんがいる。小さくてもいいから店を開きたい」。東海林さんは、そう思うようになった。88歳で、今でもメリヤス工場の仕事をしている義母の「仕事があるって良いことなんだよ」という言葉も東海林さんの背中を押した。商工会から、復興に関しての支援制度の

情報もたらされた。

震災から1ヵ月も経たない3月末、倉庫代わりにしていた空き店舗を使い、仮設店舗をオープンした。仮設店舗のオープンには、女性部時代の仲間たちが駆けつけてくれた。

「仮設店舗は狭いうえ、水道もなく、トイレもない。お客さんがくつろげる場所もない。傷んだ蔵を改修するには大きな資金が必要で、この歳で新たに店をつくってもどうだろうか」。東海林さんは、本格的な店舗の再開に悩んだ。

大震災から1年4ヵ月後に、ブティックを再開

しかし、「お客さんが来て、楽しんでくれるんだったら」との思いが募り、福島県の復興支援制度を活用して蔵を解体し、「ちっちゃな店舗」をつくることを決意した。

補助金を受けるため県に相談に行く。担当者から、「ずいぶん可愛い店ですね」と言われました」と苦笑する。設計の段階で、「長く使える耐震店舗をつくりたい」「町に喫茶店がないので、地元の人が気軽に集える店舗をつくりたい」と思うようになり、最終的には約65平方メートルの店舗が完成した。

昨年7月6日オープンの日を迎え、新しい店舗を前にして、「安心したというより、以前のようにお客さんが来てくれるだろうか不安でした」。東海林さんの不安をよそにオープン当日は、「この日を待っていたんですよ」と、商工会の女性部の仲間や昔からのお客さん、新たなお客さんが大勢押しかけた。その光景を見ながら、「頑張らなくて」と、東海林さんは、

思いを新たにした。

ウインドウに飾ったひな人形で、店内が華やぐ

国見町商工会経営指導員の帆刈聖子さんからの「店にひな人形を飾ったら」とのアドバイスで、今年3月にはウインドウにひな人形を飾った。東海林さんの妹が使っていたひな人形やお客さんから提供してもらった人形などが並び、店内は華やいだ。その様子が地元の新聞に取り上げられた。新聞を見た人が、「女房が病気で倒れてしまったんです。人形を預かっていただけませんか」と、数体の人形を車に積んで店を訪れた。その人形も飾った。

店の前を通り、店に飾った人形に気がつき、わざわざ店に立ち寄って、話し込む人も多かったという。東海林さんは、「この試みが他の店舗にも広がれば、町が明るくなるのではないでしょうかと話す。

ブティックは午前9時半から、午後6時まで開けている。「なるべく店に出るようにしているんです。店に来るお客さんとお話するのが楽しいですからね」。東海林さんと、お客さんの明るい話し声が店内にこだまする。